（別紙4）　　平成　24　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	0970400750		
法人名	社会福祉法人　報徳会		
事業所名	グループホームあゆ		
所在地	栃木県佐野市仙波町504-6		
自己評価作成日	平成24年6月22日	評価結果市町村受理日	平成24年9月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/Top.do?PCD=09

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会
所在地	栃木県宇都宮市若草1－10－6
訪問調査日	平成24年7月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

ホームは郊外の山間の自然豊かな環境の中に位置し、近くには保育園や小・中学校があり子供達と触れ合う機会が多くあり、「一軒の家」として町会に加入し7年が経過しようとする今、コミュニティが残るこの町内は利用者を支えてくれる最大の資源となっている。ホームで開催している認知症サポーター講座や地域交流会や防災訓練等には多くの参加があり応援者となってくれている。認知症になっても自分らしく有する力を発揮しながら地域で暮らし続けられるよう、職員各々が地域と支え支えられる関係作りに努めているホームである。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

当ホームは、郊外の山間部の自然に囲まれた環境の中に一般の民家のように佇んでいる。地域活動の盛んな地区で、行事や活動に積極的に参加し、地域の一員として事業所ぐるみで交流を図っている。特に小学生との心温まる交流は利用者の生活の励みともなっている。災害防止対策でも、災害訓練は消防署の指導のもと地域の人の参加を得て行っており、近隣の5軒の家にはホットラインの登録をしてもらっている。事業所も地域における避難場所の1つになっているなど、地域との協力関係の構築に努めている。事業所が一体となり利用者の思いや意向の把握に努め、家族や地域の人や主治医など関係者と連携しながら、利用者が地域の中で「自分らしくゆっくりとゆとりを持って暮らせるよう」支援している。

V．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
		○	2. 数日に1回程度
			3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）	○	1. 大いに増えている
			2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
		○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「自分らしくゆっくりとゆとりを持って暮らしたい」という理念は利用者、職員の思いとして捉え月一回の会議において、各々の取り組みを振り返り改善すべき点を話し合い理念の共有と実践の取り組みを日々行っている。	当ホームの独自の理念を月1回のカンファレンス及び日々の業務交代時などに確認し、職員間の共有を図っている。職員は、利用者のペースに合わせて「ゆっくりと」を念頭においてサービスの実践にあたっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入し、年3回の地域清掃活動には職員が交替で参加している他、地域の行事や保育園・小学校の行事などにも参加している。 また年2回ホームで地域交流会を開催している他、町内の子供会・育成会との触れ合いもあり積極的に交流に努めている。	町内の福祉レクリエーションや盆踊りへの参加、子ども会・育成会との交流、ホームの地域交流会への地域住民の招待などを通して地域との交流を活発に行なっている。特に小学校児童とは出向いたり迎えたりして楽しい交流を行なっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域住民より認知症の問い合わせや相談には助言や情報提供を行っている。 当ホームにて「認知症サポーター講座」なども開催し、多くの地域住民の参加がある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は定期的に開催し、利用者・家族・町会長・班長・民生委員・老人会長・市職員等の10名以上の出席が得られ積極的な意見交換や提案がなされ貴重なアドバイスとしてホームの運営に活かしている。年1回メンバーには利用者と共に食事を摂ってもらい、実情を把握してもらっている。	運営推進会議は、2ヶ月に1回利用者、家族、市担当者、地域包括支援センター職員、民生委員、町内会長、老人会長、時には消防署員などの参加を得て開催している。外部評価結果などの報告や、ホームや出席委員からの要望された議題について活発な意見交換がされ、結果は運営に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	H22の外部評価の目標達成計画の如く、市担当者に運営推進会議に出席してもらい運営や実情について話し合い対応に共に取り組んでもらっている。 直面している課題については市担当者が当ホームを訪れ一緒に考えてくれるなど、担当者は身近で相談しやすく協働関係が築けつつある。	市担当者は運営推進会議に出席してくれているほか、事業所の相談には必要があれば来所してくれたり、管理者が出向いても熱心に応えてくれるなど、よく連携が取れている。	市との連携がうまく図られているが、今後市内グループホーム間の交流会の実現などに向けても助言いただくなど、さらに協力関係の強化を期待したい。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員はカンファレンス時に身体拘束の事例をもとに拘束にあたる行為等の理解に努めている。家族から安全のための拘束の要望があっても、その弊害を説明しホームの取り組み方針を示し、センサーマット・センサーチャイムを導入し安全を確保し、自由な暮らしを支援している。	身体拘束及び虐待については月1回の勉強会や外部研修、日常業務の中で職員に正しい理解の徹底を図っている。特に言葉遣いについては細かく注意をしている。家族にも説明し理解してもらい、身体拘束をしないケアの実践に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連に学ぶ機会を持ち、事件が報道された時などは職員間で話し合うようにしている。 利用者を敬う言葉使いから始まり、職員一丸となり虐待防止に努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度を学ぶ機会を持つようにしたい。 しかし、職員は人間としての尊厳を大切に積極的な生活意欲を引き出すよう努めている。不当な人権侵害からは、その人を守るよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不安や疑問が生じていないか訪問時や電話等で尋ねるようにし納得のいくよう説明している。 特に家族の経済的・身体的不安には充分な配慮を行っている。本年度の料金改定についても口頭と文章にて説明し同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	職員は家族来所時には意見や要望等を聞くように努める他、運営推進会議にて外部者にも伝えられるような機会を作ると共に家族会、会員間で意見や要望を気軽に出してもらえるよう配慮している。	面会等の来所時に意見・要望用紙を家族に渡すなど意見を言いやすくする工夫をしている。家族会員の連絡網もあり、家族会を通じて意見等が表せる。出された内容は職員間で話し合い、家族に回答すると共に運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員が思いや意見を気軽に伝えられるような職場環境作りに努めている。 職員の意見や提案を月1回の会議には聞々運営に反映している。施設長も度々ホームを訪れ実情の把握に努めてくれている。	管理者はいつも職員の中にいて、職員と気軽に話せる雰囲気作りをしている。月1回のカンファレンスは職員の意見・提案を表す場になっている。最近では「母の日のカーネーション」「流しソーメン」などの提案があり、実施したところ利用者にとても喜ばれたという。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月1回の主任会議や訪れた時などに状況を把握し、職員が自信を持って働けるよう条件の整備に努めてくれている。 賞与を下げない努力をしてくれている。 ホームを訪れた際は気軽に声を掛けてくれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人外の「認知症を理解する」「やさしい認知症講座」等の研修、法人内の「介護保険制度について」「摂食・嚥下障害について」「口腔ケア・排泄ケア」等の研修を受ける機会の確保に努めている。 ホーム内では月1回の勉強会を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者同士の交流はあるが、職員同士が交流する機会が今は出来ていない。相互訪問等を通じて質の向上を図りたい。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	自宅を訪問し、心理的抵抗を理解し、共感姿勢で傾聴するよう努めている。自宅に代わる暮らしの場として本人が安心し、落ち着けるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅を何度か訪問し、困り事を傾聴し、援助内容を話し合い、来所してもらいホームの環境、雰囲気を感じて頂き、安心してもらえるよう充分な心理的サポートの提供に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込みに来所された本人家族等の話を傾聴し、充分な支援の提供が困難と判断された場合は、他のサービスの情報提供を行うなど柔軟な対応を心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	草取りや掃除、食事作りや裁縫など一緒に行う中で、入居者に教えられる事も多い為、職員一人ひとりが入居者の個性や能力を大切にする事に努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と職員との自宅訪問や定期的な写真入り状況報告の手紙や、家族と一緒に食事会や誕生会等を行うと共に、容体変化時は一緒に受診してもらうなどの取り組みをしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者の自宅や生家、馴染みの場所や洋服店、食事処などに職員が同行し出かけたり、馴染みの美容室や知人などに来てもらったりしている。	馴染みの人や場については、利用者本人に問いかけたり、家族から聞いた本人の生活歴などから把握している。生まれた家に行って親の写真に手を合わせたり、知人や馴染みの美容師に来てもらうなど大切にしてきた関係が途切れないよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	自然とテレビ前に集う関係作りを築くと共に食事時や外出時の座る場所などは、入居者同士の関係を配慮している。 随時職員同士話し合い、良好な人間関係作りに努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終了後も病院施設等を訪れ本人に面会したり、家族からは電話にての今後についての多くの相談が寄せられる為支援に努めている。 終焉の時には必ず会いに行くようにしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	1年交替に利用者の担当者を決め、出来る事・したい事の把握に努め「私の姿と気持ちシート」にまとめ、職員同士が情報を共有し合い、思いや意向を汲み取り支援している。	本人の思いや意向は、職員が、本人とのかかわりの中から確認、推察するなどして、A4 1枚の「私の姿と気持ちシート」にまとめ、情報を職員間で共有し、本人の思いに沿った支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	自宅に訪問し、生活歴や暮らし方、環境の把握に努めると共に、利用していたサービス事業者からの情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の支援の中での職員の気づきや意見を個人記録や医療ノートに詳しく記録し周知し合っている。業務日誌の中で申し送り、確認し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は本人、家族の要望を基に作成している。利用者担当職員は3カ月に1回、課題とケアの在り方を話し合っている。 利用者の状態等に変化が生じた場合は家族、主治医も含め話し合い適宜見直しを行っている。	介護計画は、本人の希望や家族の意見を聞き、シートなども参考にし、ケアマネジャーが原案を作り、全職員が見て、家族の確認をもらっている。 6ヶ月ごとに見直ししているが、状態が変化した場合には家族と話し合い実情に即した計画に変更することもある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	様子や気付きなど個人記録に細やかに記録するようにし、業務日誌にて工夫や実践、結果をカンファ時に情報を共有し、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	外出、外泊時の迎えの時間の変更や、食事の変更にも柔軟に対応すると共に、家族も一緒に食事を取れるように対応している。他通院や買い物にも同行している。		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が安全かつ豊かな暮らしを楽しめるよう、消防署、、駐在所、小学校との交流や地域の人たちの力を借りた取り組みを継続的、計画的に行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者・家族の了解のもと、土・日診療し入院が必要な場合などは医療関係を紹介してくれるホーム協力医に変更してもらい、毎月1回の往診や24時間対応も行ってもらっている。 精神科、婦人科、皮膚科、歯科等は他医院での受診を支援している。	かかりつけ医は本人、家族の希望に沿った医療機関で受診できるよう支援している。地理的利便性等から入居時に確認した上でホーム協力医への変更もしてもらっている。他の診療科受診は家族対応だが、要望があれば職員の支援も行なっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場には看護職の配置はないが、法人の看護が相談にのってくれ対応に当たってくれている。 主治医の看護師も相談にのってくれ、主治医と連絡を取り指示をしてくれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	主治医が状態に応じて、入院先病院の手配をしてくれている。主治医の持ちベッド病院に入院させてくれ主治医となってくれ情報交換や相談がスムーズに行えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ホームの出来る対応範囲など入居時、面会時などに話し合い、その時が来た場合にはホームの力量を把握した上で主治医等の意見を参考に現状を見極め、職員間で話し合い、関係機関との連携を強化している。	重度化・終末期に向けた方針は入居時に本人・家族と話し合い、事業所の方針や出来る範囲を説明している。状態の悪化に応じて本人・家族に意向を聞きながら主治医の意見を参考にして事業所全体で終末期の支援に取組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	以前に法人看護による勉強会を行い手引きだけを所持しているだけに留まっている。実際の場面で活かせる職員が少ないのが実情である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署と連携し全職員、地域の方々と共に年2回防災訓練を実施している。月1回の会議時には必ず避難方法を確認し合っている。 H23年3月11日の震災の際は逸早く地域の方々が駆けつけてくれた、またその時を教訓に食糧を備蓄している。	防災訓練は消防署の協力のもと、近隣の人の参加を得て、避難・誘導・消火訓練等を年2回実施している。近隣5軒とはホットラインが出来ている。事業所は地域の避難所の1つになっており地域との強い協力関係が出来ている。また東日本大震災の教訓から備蓄の充実も図っている。	

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	会議等において人権尊重について点検し合っている。名前を呼ぶ際は「○○さん」呼びをし、特にトイレ誘導時には本人の誇りやプライバシーを損なわないような言葉かけに配慮している。 閲覧される記録等は居室ネームで記すようにしている。個人名が見えないよう目隠しする等の対応をしている。	1人ひとりの人格を尊重し、さん付けで呼びかけるようにし、言葉かけや対応にも配慮している。個人記録は事務室の所定の場所で管理し、個別ファイルは個人名でなく居室名（花の名称）を記している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者一人ひとりがどういう時にどのように意思表示をするのか常に職員同士が情報を共有し合い希望の把握に努め、ある程度の利用者の思いは汲み取れるが汲み取り難い時があるのも実情である。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先するのではなく利用者のペースに合せゆっくりゆとりを持って対応するようにしている。 利用者も時間に捕われる事無く離床し、見たいテレビを見てから着床している。休憩時間をずらしたり、勤務変更をしたりしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪染めの支援、長年使い慣れた化粧品を切らさない支援、本人が好む洋服購入の支援などを行っている。 居室担当者が洋服の整理など一緒に行うようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の好みの把握に努めると共に郷土料理や季節メニューや行事食等を取り入れ献立を立てている。利用者は競って包丁を使い調理の下準備をし、食器洗いやお盆、テーブル拭きなど職員と共に行っている。	1人ひとりの好みを把握し、職員が交代で献立・食材調達・調理を行っている。包丁を使っての下準備や片付けなど利用者は楽しんで職員と共に行ない、食事も一緒に和やかに摂っている。献立については法人の栄養士が確認をしている。月3回は外食にし、食事を楽しめる工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	細かな食事・水分チェックを行い、摂食障害のある方には一の膳、二の膳に分け提供したり、5回に分け提供してみたりと細かな工夫をしている他、捕食により栄養バランスを確保している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、除菌液にてうがいや歯磨きをしてもらっている。ブラシを拒否される方にはスポンジブラシで対応している。 毎晩義歯洗浄剤にて除菌を行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表により排泄パターンを把握し、声かけ誘導を行い、失禁を減らすようにしている。夜間は紙おむつでも日中は布パンツで過ごしてもらうようにしている。トイレで自立した排泄が出来るよう支援している。	排泄の自立を念頭に支援しており、ほとんどの利用者が日中は布パンツ使用であるが、トイレ誘導の際は自尊心を傷つけないで排泄に向かえるよう、「ちょっとそこまで」「野良仕事に行きましょう」など呼びかけ方を工夫している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄表により、排泄パターンを把握し、声かけ誘導を行い便秘予防の運動、腹部マッサージを行い、ヨーグルトや食物繊維をとってもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員配置上、希望の時間での入浴は難しいが、利用者が好む入浴剤を使用するようにしている。 入浴が嫌いな方にはタイミングを見計らいながら入浴を促している。	浴室は大きくはないが家庭的で、介護はイスを利用し工夫している。週2～3回ペースで午後に入浴している。行事等の関係で午前の場合もある。5種類の入浴剤を希望で使い分けている。入浴を嫌がる人には工夫をして誘導している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休みたい時に居室に戻り休んでもらっている。就寝・起床時間には一人ひとりに合わせて対応している。ほとんどの入居者が時間を見ながら行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の説明を個々にファイルし理解し合っている。薬変更時は医療ノートに記入し症状の変化に注意を払い様子を観察するように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居時の生活歴などの情報や本人の希望から自分らしく過ごせるよう、食事の準備、洗濯たたみ、掃除、裁縫、塗り絵、カラオケなど役割や気晴らしの支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	戸外に出かける支援に努めている。利用者の行った事のない大洗、那須、宇都宮などの遠方にも出かけている。 地域の方も出かける切っ掛けを作ってくれる他、職員が対応できない場合は家族が協力してくれている。	散歩は毎日1～2名ずつ車イスなど利用しながら均等に出られるよう実施している。月1回の遠出や友人、馴染みの美容室、食堂や実家訪問など家族の協力も得ながら日常の外出支援をしている。また、地域の人からの情報や誘いによる地域の行事参加のための外出支援も積極的に行なっている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ほとんどの方が管理者・家族が管理している。 お小遣いの中から小銭を所持し使えるよう努めたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	以前の利用者には支援していたが、現在の利用者にはその訴えがない為行っていない。 近況報告の言葉や写真を添えるなどの支援を行っていきたい。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間には利用者の笑顔の写真や小学生から贈られた作品などが飾り付けられている。行事（正月・節句・七夕・クリスマス）に合った飾り付けもされる。散歩に出かけ摘んできた花を飾るなどし、季節感も味わってもらっている。 天窓から軟らかな明かりと自然喚起を取り入れ落ち着ける環境作りに努めている。	共用空間は自然換気で嫌な臭いもなく天窓からの明かりが軟らかく、テレビの前のソファーや食卓のイスなどが居心地の良い利用者のくつろぎの場となっている。壁には小学生たちの折紙や手紙、近所の人たちや職員の手作りの作品が飾られ、季節の花も置かれて温かい雰囲気に溢れている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳6畳半の「なごみ」という部屋があり、前庭の花や植木を眺め独り静かに過ごす事が出来たり、テレビ前にはソファが配置され気のあった利用者同士で過ごせたりと、思い思いの場所で過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室3畳分の畳の先には掃き出し式の大きな窓があり風景を楽しみながら家族・知人とゆっくり過ごせるようになっている。馴染みのタンス、ベッド、布団、テーブルなどが持ち込まれている。利用者の中には自宅の自分の部屋を再現している方もいる。	どの居室にも空気清浄機が置かれ、掃き出し式の大きな窓で明るく清潔で開放感のある空間になっている。家具その他使い慣れた物を自由に持ち込めるようにしているが、ご主人の写真を飾り毎日お茶を上げている方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアーの壁、トイレ、浴槽には手すりを取り付けている。トイレマークだけでなく手書きでトイレと示している。居室がわかるよう目線に合わせ花のマークが付けられている。		